別紙様式1

令和5年度　学校自己評価表

（ 中間・ 最終 ）　　学校名　三原市立南小学校　　校番（ ９ ）

a 学校教育目標	夢に向かって　ともに学び　ともに伸びる子どもの育成 ～　かがやけ南　心はひとつ　～	b 経営理念 （ミッション・ビジョン）	【ミッション】（自校の使命）　夢を持ち、未来を切り拓く子どもの育成 【ビジョン】（自校の将来像）みんなの笑顔があふれる，安心・安全な学校 自分や相手のよさを理解し協力して活動できる子ども 児童理解に努め、個々の力の向上に向け切磋琢磨し挑戦する教職員

評価計画							自己評価					改善方策	学校関係者評価			
	c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策		f 評価項目・指標	g 目標値	８月 h達成値	2月 h達成値	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方策	Ⅰ評価 イ	ロ	ハ	m コメント
確かな学力	主体的・対話的で深い学びを追究する	自ら考え学び合う児童	○改善の視点を明確にした，子ども起点の授業づくり ・「問いの設定と探究」を視点にした授業改善を着実に進める。 ・授業・学力向上に係るICTの効果的な活用方法を追求する。 ○基礎学力の定着の徹底と個に応じた個別指導の充実 ・「チャレンジタイム」「やればできるっ！検定」「きいてねタイム」で個別目標を設定し，年間を通じて継続実施する。	研究部	○単元末テスト（国・算）の学校平均点 8月…4月～7月分（1学期） 2月…9月～12月分（2学期） ○児童アンケート調査 ・「自分の考えを図・式・ことばなどで友達に伝えることができた」と肯定的に解答する児童の割合 ・「算数の授業がよく分かる」と肯定的に回答する児童の割合	各教科・項目ともに80%以上	国 86 算 82 表現 78.3 分かる 85.1		国 107.5 算 102.5 表現 97.8 分かる 106.3	A B	・学年別に見ると，4年生算数科（79）5年生算数科（79）6年生算数科（73）と，3学年が目標値に達していない。低学年からの四則計算の定着や，全教職員の児童の学力の向上，授業力が課題である。 ・図や式を用いてペアの友達に話せても，全体の場で話すことに苦手意識をもっている児童が多い。学習内容が理解できていないことも話せない原因である。	○算数科の教育研究を通して，新しい単元に入る前には，その単元に関わる既習事項を復習するなどして，個々のレディネスを高めスタートラインを揃え，問題解決者として自立させ，授業に参加させる。 ○チャレン図タイムの中で，それぞれの学年に必要な表現方法を反復練習する。 ○どの子も話しやすい雰囲気づくりや，個々の話す力の向上を目指し，学びに参加する基本的な姿勢（声の大きさ・学習規律）を学校全体で統一させる。	○			・低学年では、しっかりとした基礎学力が身についている。学校の丁寧な取組の成果が見られる。 ・算数の平均点が、高学年になるにつれて下がっているのが気になる。高学年の学力の向上のため、授業力をさらに磨いてほしい。 ・全学年の児童が落ち着いて授業に取り組んでいた。今後も取組の目的や課題を明確にして、継続して取組を進めてほしい。
豊かな心	自他を尊重する心情・態度を育てる	思いを受け止め認め合う児童	○安全・安心な風土の醸成 ・「南小スタンダード」を徹底する。 （挨拶・廊下歩行・言葉遣い・時間を守る・話の聴き方） ・月間目標の主体的な設定や取組交流と学校のきまり、生徒指導規定の見直しと改定を行う。 ○学級・学年経営を基盤とした支持的風土の醸成 ・教室環境を整え、生徒指導の4つの視点を生かした児童支援を行い、学習規律の徹底を図る。 ・児童会や委員会、各学年と連携し学年交流の充実を図り、意図的な活動や縦割り班活動等での児童同士のかかわりを深め、自己有用感を高める。	生徒指導部	○Hyper－QUによる学級満足度 全国平均値との比較 ○自己有用感に係る児童アンケート 肯定的に回答する児童の割合 「自分にはよいところがある」 「よさを友達に認められている」	全国平均以上 80%以上	QU 16/18 有用 76.8		QU 88.9 96.0	B B	・ハイパーQUの結果において，学級満足群の割合が全国平均以上が達成できなかったのは2学級である。また，学級不満足群の中の要支援群に位置する児童は9名いる。そのうち1名は，昨年度も要支援群である。クラス替えがあり新しい環境の中で不安を抱えていた児童がいたことに加え，家庭環境等の背景も重なっていると考えられる。 ・児童アンケート「自分にはよいところがある」「よさを友達に認められている」において，ともに肯定的評価の児童80%以上の学級は8学級であった。全校での割合は，「自分にはよいところがある」が78.7%，「よさを友達に認められている」が74.8%である。	○個の背景を理解して適切な支援を行い，要支援群の児童については，変容も含めて継続して見取っていく。 ○週1回の職員連絡会10分間で，これまでの実践からこだわってやってきたこと，有効だった取組や手立てについて一人ずつ紹介し合う学習集団づくり研修を行い，学びを蓄積していく。 ○全教職員で一人一人の頑張る姿や優しい姿を逃さず認め声をかけていくこと，さらには担任にその姿を伝え，当該児童や学級全体に，学年全体に，そして学校全体に投げかけていく。 ○「南小の自慢を増やそう」と，全校で取り組むことを児童会が中心となり全校に発信したり，目標設定し達成できたら児童の成就感につながる活動を企画する中で，つながりを深め，相手を思いやる心，感謝する心を育てていく。	○			・要支援の児童を多く抱える中、児童の個の背景を理解しながら、自尊感情を高める努力を組織的に行っているところが素晴らしい。 ・「南小スタンダード」が定着し、児童が落ち着いて生活できている。今後もこの方針を基本に、頑張ってほしい。 ・ハイパーQUで課題があった学級には全校体制でフォローをしていってほしい。 ・課題がある児童については、学校・家庭・核となる人等が問題を共有し、時間をかけて取り組む必要があると思う。
健やかな体	心身の強さと運動能力の向上を図る	切磋琢磨し高め合う児童	○楽しみながらできる体力つくりの推進 ・児童の運動量の確保に向けた体育科授業改善に取り組む。（基礎体力の向上・実技研修の実施） ・外遊びの励行と充実を図る。 ○食育の推進 ・栄養士による食育指導 ・給食のもりもりキャンペーンの実施	保体部	○体育科授業改善に向けた職員の実技研修の実施 ・児童アンケート調査「体を動かすことが好き」の項目80%以上 ○食育指導 ・栄養士による食育指導を各学年年間1回以上実施 ・給食アンケート調査「苦手なものも食べようと努力した」の項目80%以上	実技指導・食育指導年間3回以上 アンケート調査肯定的評価80%以上	好き 85.0% 努力 88.5%		106.2% 110.6%	A A	○保健体育部を中心に実技研修等で学んだ内容を，夏季休業中に職員向けに還元研修を行った。 体育科の授業で行えるエクササイズを研修したことで，児童が体を動かすことを楽しいと感じられるようになってきた。 ○栄養士による食育指導は，全学年1学期に実施することができた。食育指導後は，指導前に比べ残菜が減っていたと栄養教諭から報告を受けた。	○体を動かすことが好きと答える児童が多いため，体育の時間だけでなく，家庭でもできる手軽な運動やこつを紹介した動画等を共有し，日常的にさらに運動に親しめるようにする。 ○栄養士の話や生産者さんを身近に感じられる出前授業等を計画的に取り入れ，引き続き食に関心をもてるようにする。 ○12時25分までに給食を食べ始めることを徹底させることで，食べる時間を確保していく。	○			・普段から外遊びをする児童が多く、自然に体力もついている気がする。児童の体力向上を図る取組を継続してほしい。 ・給食の残菜が少なくなるよう、栄養士・生産者等とともに工夫して取組を進めてほしい。
信頼される学校	保護者、地域の願いに応え，信頼される学校づくりを推進する	「地域とともにある学校」に向けた基盤づくり	○コミュニティ・スクール導入に向けた環境整備 ・先進校視察や市教委との連携し、校内研修や全体構想立案を行う。 ・構成メンバーや委員長・本部長等の人選をする。 ・地域・保護者と連携し、地域人材を発掘する。	教務部	○コミュニティ・スクール導入 準備会の開催回数	2回以上	2回		100.0%	A	○コミュニティ・スクールに関する特設講座に参加し，先進校の実践を聞いたり，他校の先生と協議したりすることができた。 ○コミュニティ・スクール導入に向けて，学校運営協議会委員等の人選が進んでいる。	○令和6年度からのコミュニティ・スクール先行導入に向けて，準備会を重ねていく。	○			・コミュニティ・スクールでは、全面的に協力していきたい。
		健康でやりがいを持って勤務できる環境づくり	○支持的風土の醸成と自己研鑽による人間力の向上 ・チーム力を活かし、計画的・協働的に業務を推進する。 ・教職員自身による熟議によってワークライフバランスとメンタルヘルスの意識改革を進め、改善を主体的に進める。	総務	○勤務時間外の在校時間が年間360時間未満の職員の割合 （目安） 前期…180時間以下 後期…360時間未満 ○業務改善進捗評価アンケートによる全職員の3以上の肯定的評価の平均	80%以上	在校時間 68.7% 業務改善 81.4%		在校時間 85.8% 業務改善 101.7%	B A	○目標に達した教職員は昨年度より増え、生徒指導や授業改善に組織的に取り組んでいることが在校時間の縮減につながっている。管理職，研究主任の勤務時間外在校時間が長いため、見通しをもった計画的な業務の推進が必要である。 ○研修等が自己の働き方に対する意識の醸成につながっている。ICTを活用し、フォームでの教材作成やアンケート集計など業務の効率化を図る職員が増えたが，ICTを活用するスキルには個人差がある。	○部内での業務振り分けの見直しを行い、各部が進捗状況を確認しながら見通しをもった業務遂行ができるようにする。 ○会議や行事の目的を明確にし，内容の見直しや開催方法の工夫、準備の簡素化等を行うことを通して、取組の質の向上を進める。 ○時間を要している教材作成の電子データ化や、共有化のシステムづくりを進める。 ○ICT支援員と連携し、ICT活用にかかわる事務処理速度の向上等の研修を行う。	○			・教職員が健康でなければ児童たちにも負担がかかるので、教職員のチームワークを生かし、業務を遂行してほしい。

【ｊ：自己評価・評価】
A：100≦（目標達成）　B：80≦（ほぼ達成）＜100　C：60≦（もう少し）＜80　D：（できていない）＜60

【Ⅰ：学校関係者評価・評価】
イ：自己評価は適正である。　ロ：自己評価は適正でない。　ハ：分からない。